

明治期の武士道についての一考察

—新渡戸稲造『武士道』を中心に—

船津 明生

キーワード 士族階層、新渡戸稲造、キリスト教的武士道、名誉の概念

一、はじめに

武士階級が消滅した明治期においても武士道は存続した。旧武士階級から士族階層への変遷、また明治期における士族階層の役割・足跡を追いながら、明治日本に影響を与えた思想としての武士道について一考察を試みたい。

武士道の成立に関しては諸説あり、武士道そのものの定義もあいまいである。それは武士道がもつ時代ごとのさまざまな諸相である歴史的特殊性を明らかにすることなしには概括すら困難であるという点に理由がある。武士道の概念化・一般化を行うよりもまず時代ごとの諸相を観察することによって武士道の全体像を俯瞰する視点を構築するところから始めなくてはならない。

明治期における武士階級の解体がどのように行われ士族階層の形成へと繋がっていったのか、士族階層が明治日本の社会階層のどの部分に位置し、どのような役割を担っていたのかを明らかにしたうえでその士族階層が持っていた行動規範なり規律・道徳を考えていくことが必要である。

明治期において武士道は以下のような流れを形成することになる。

1) 山岡鉄舟等の旧来の武士道を守り伝統を伝えるもの、また福沢諭吉『やせ我慢の説』等に代表される精神論に受け継がれていく<和魂的武士道>。

2) 『葉隠』の伝統を残し、軍人勅諭等に代表される天皇中心の政治形態を強固なものにしようとするイデオロギーとしての滅私奉公を基本理念とした<皇道的武士道>。

3) 新渡戸稲造『武士道』に代表されるプロテスタント精神との融合を目指し、国際的かつ普遍的な思想へと武士道を高めていこうとした<キリスト教的武士道>。

これまで武士道といえば1)及び2)のような形で取り上げられることが多かったが、本論後半においては3)の新渡戸らキリスト教者たちが考えたことを新渡戸稲造の著作『武士道』を中心に論じてみたい。キリスト教徒である新

渡戸は、当時の先進国における思想の原点であるキリスト教的世界観と武士道をどう融合させ西欧諸国の共感を得ようとしたのか。そしてその過程において武士道に世界的普遍性は付与できたのかを考えてみたい。

二、武士道の歴史的成立過程

武士道の起源に関しては、一般的に「武士道は武士階級の台頭とともに現れ、徳川期において完成した」とされるが、時代ごとに概観してみる。

・上代における武人精神

元来「武」という語の意味するものは戦闘技能である。建国・統一に際して物部氏が朝廷へ武をもって仕えた事実は、主に戦闘に従事する技能集団が当時存在していたことを示している。武士を「もののふ」と呼ぶのは物部氏が由来であり、¹また律令の官制においても兵部省があり征夷大將軍とその部隊が存在していたわけであるから中世の武家の淵源をそこに求めることは可能である。しかし平安時代に続いた平和によって、また中世の武家のその発生の理由において中世以降の武士とは断絶しているとみられている。

・平安時代後期における武士階級の台頭

荘園制度の緩慢な崩壊、中央集権制度の疲弊等による地方の混乱に乗じて各地に大地主が出現し、その土地を守るための自警団が自然発生していった。その集団は頭領を戴き、家子郎党と呼ばれる主従関係によって結ばれているという武士道の基本的な特徴を持っている点で上代における武人、朝廷に仕える物部氏等とは一線を画する。

「家」の概念、主人としての父親を中心とした家父長制度の成立と主従関係そのものの世襲的継続がその集団の団結を強固なものにしていき、そこに見られる献身の道徳が「武者の習い」として確立していく。

利己主義の克服、犠牲的精神の発露、家の存続・繁栄のため身をすてるところに「永代の面目」、<名誉>という概念を見出し、価値を認めるといった、江戸期に見られる儒教的精神と並ぶ武士道の根本的倫理観がここに具現化していったのである。さらに武士はこの時期自然発生的に生まれたと定説になっているが、その棟梁となる源平両氏の起源をたどれば都を離れ土着した下級貴族であるから、この頃の武士の定義としては「下級貴族の子孫」をリーダーとする「戦闘技能集団」であり「土地所有者」とその係累である、といえる。付け

加えるならば天皇の子孫である下級貴族の血を引くことで天皇への崇拜心は綿々と存続し、その後の政権構想に影響していったといえよう。

・鎌倉時代の武士階級

武士が政治的・軍事的に権力を持つようになった時代である。武士道の初期段階として「貞永式目」を見れば、そこには職制や法令によって武士の日常生活を律し、社会生活における規律、武士の政治的地位を高めるための道德教育などが制定されている。特筆すべきはその五十一条の冒頭の三箇条が社寺尊重、祭祀・仏事の奨励とあり、武士の道德教育に宗教を利用している点がすでに成文化されていることである。ともすれば普通の平穩な日常生活を軽視しがちな戦闘集団に絶対者の存在を認識させたといえる。

またこの時期に禅宗との結びつきが見られる。天台・真言等の貴族のための仏教、またそれ自体兵をもつ独立集団への対抗措置として、武士階級と禅との接近があった。結びつきの発端は現世的にせよ、「不立文字」等の教義、死の恐怖に打ち克つための教えなど、禅が武士の精神を啓発した経緯は見逃せない。加えて武士と仏教の結びつきに寄与したものとして「怨親平等」の思想がある。古田紹欽は「戦争による生命の犠牲は殺す場合にせよその反対にせよいずれにしても武士の背負わなくてはならない宿業であるが、死んだのちは敵味方もなく怨に報うのに恩をもってするという仏教思想が武士に与えたものははかりしれない。後世の武士道には儒教思想が浸透しているが、武士の思想を支えているもののなかに仏教の占めるところは決して小さくはない」と述べる。²

・室町から戦国時代の武士

まさに武士がその本領を発揮していたであろうこの時期において、武士道は思想的なものでも日常生活の規律でもなく、まさしく戦いの日々における処世訓であった。この時期には戦陣での諸注意、日々の生活の戒め、戦士としての心がけなどを書き記した書が多い。『早雲寺殿二十一箇条』、『信玄家法』、『掟書』等々、後に明治三十八年の『武士道叢書』、また昭和一七年の『武士道全書』に収められ、軍人の基本的心構えとして称揚された家訓、戦陣訓、武士道書の類が多くこの時期に書かれている。また鎌倉時代の基本的理念である「忠」という情念的なものが、この時期には実力重視、力のない主人は見限ってもかまわないどころか取って変わってもよいとする下克上の思想に変化していったのである。

・江戸時代の武士道

そもそも武士道という言葉そのものが江戸時代の産物であるとされている。³幕藩体制下において、武士の社会的機能は戦士から政治家及び行政官僚と変化せざるを得なかった。このような武士の存在理由そのものが問われた時代に儒教精神の受容が積極的に行われたのである。山鹿素行、熊沢蕃山、中江藤樹などの儒者達による「士道」としての武士道の確立である。彼等は儒教によって武士が士農工商のトップに立つ理想的君子たるべきモラルバックボーンを確立したのである。山鹿が講義を行った赤穂浅野家の義挙、その山鹿の書に傾倒した吉田松陰の松下村塾が維新の際輩出した勤王の志士など幾多の実例から、この時期の武士の思想形成に多大な影響を及ぼしたことは間違いのない。単なる処世訓としての武士道に新たな哲学的要素を加味し、体系的な思想へと武士道を発展させていったのである。また「士道」とは別の形で、『葉隠』のような地方において幕末にその存在が明らかになるまで綿々と育まれ伝えられた武士道思想も存在する。

三、幕末から明治期における武士階級の変遷

明治政府が目指すその中央集権的国家体制は江戸期の幕藩制を根本から覆すものとなり、その制度的変革を推進する過程において地方に割拠する武家（藩）は解体された。その結果、四民のトップであるという身分や権限・俸給等は新政府から否定され、武士という階級は消滅したが、武士階級は士族という族籍にそのまま移行した。その後下級武士や足軽身分の多数は平民へと吸収され、以前は平民であった者が士族へ編入されるなどの変化もあり厳密には武士階級イコール士族階層とはなっていないが、士族の大部分は旧武士階級と重なる。

明治維新へと繋がる幕末における武士の思想の変化と武士階級の消滅の経過、明治初期の士族の社会的地位、職業などを概観してみることにする。

・幕末における武士の思想の変化

まず水戸学派の尊皇思想及び国体論が挙げられる。水戸藩の思想家、会沢正志斎は列強が日本に対して開国をせまった危機の時代に、日本いかにあるべきかの基本方針を天皇ナショナリズムにもとづき展開した。⁴この思想は攘夷論とも結びつき幕藩制に対する反体制思想を育む基盤となった。

攘夷主義の台頭に国民主義の萌芽を見るとの説もある。⁵幕府の開国主義はあくまでも幕府の利益・存続を根幹においており、反対に攘夷思想は反封建的で

はなかったものの、反幕的雄藩によって行われた国民統一へとつながった点において歴史的意義があるとしている。

さらに貨幣経済の浸透により武士の経済行為自体への積極的関与が見られるようになったことも思想変化のひとつであろう。儒教精神においては武士が商行為に関わることはタブーであった。しかし外国勢力の脅威への具体的な対応策としての国防論・富国強兵策を推進するにあたって経済政策への提言が行われるようになった。当然このことは体制の制度的改革を促進することになる。

また国内経済政策の破綻により下級武士の困窮は甚だしく体制内の不満分子として幕府解体の力の源となっていく。藩による禄米借り上げ等によって生じた慢性的な貧困は体制打破のエネルギーとなり、上士と下士との対立は現状打破の思想へと繋がっていく。

・武士階級消滅への諸改革及び事件

遠山茂樹は「歴史的画期としての明治維新は、天保一二年の幕政改革に始まり、明治十年の西南の役をもって終わる、三十七年間の絶対主義形成の過程である」⁶と述べたが、元号が明治に明治に変わってからのわずか十数年の間に進行した事態を列挙すると驚くべきスピードで武士という社会的階層の消滅が進行したことがわかる。

版籍奉還（明治二年）に始まり廃藩置県（明治四年）による武家そのものの消滅、一連の秩禄処分（明治二年より）による財政的な封建武士身分制度の撤廃、名分的ではあったものの武士の専門的職分であったとされた戦士としての存在価値を奪い去る徴兵令（明治六年）、支配階級のシンボルとしての帯刀を禁止する廃刀令（明治九年）、そして不平士族の反乱としては最後になった西南の役（明治十年）である。

明治に入ってから是非常に速やかに頑強な抵抗もなく変化が起こったのは、戦士であり土地所有者であった武士が江戸期において禄米取りとなり武士の本質を失い、三百年をかけてゆるやかに崩壊していたのだとの指摘もある。⁷

・明治初期における士族階層

「士族」とは基本的に、明治二（1869）年の版籍奉還に伴い廃止された「士農工商」に代わる名称で、族籍と呼ばれる法律的规定に基づく呼称である。⁸

旧来の武士と士族を同一視することはできないが、明治期において士族の果たした役割・階層は、士族の大部分が旧武士によって構成されているという点において旧武士、またその子孫のそれと考えるとよいだろう。

深谷博治は「華士族が、近代国家への日本の急展開過程において、あらゆる分野に圧倒的に指導的な役割をはたしていることである」として次の五つの点を挙げている。⁹

- ①明治政府の官吏の任に就いたものが大部分華士族であったこと。
- ②中等以上の教育を受けた者がほとんど華士族に限られ社会における指導層になっていったこと。
- ③明治政治史に重大な部面を占める自由民権運動の指導的分子がほとんど士族であったこと。
- ④選出された議員の大部分が士族であったこと。
- ⑤伝統的な商工業に参入できなかった旧士族がそれ故に主として新しい資本主義的近代産業の移入と発達を成し遂げたこと。

さらに教育勅語の発布による公教育の充実のために教員の需要が大きくなる。教師は文武両道を範とした旧武士層にふさわしい職業的威信を保っていたために、ここにも多数の士族が参入する。加えて、教育の重要性を認識していた士族は自分たちの子弟への教育もなおざりにするはずはなく、そのことがなお一層士族階層の社会的進出の基盤になっていく。

これらのことから士族階層が明治社会のリーダーシップをとっていたということが窺えるが、さらにもう一つの面にも注目したい。

堅牢な身分社会でそれぞれの身分の交流がなかった江戸期よりも、身分そのものが否定され流動的な明治期において、政治・経済・教育等の分野において指導的地位にいた旧武士の思想・哲学、思考の方向性などが徐々に社会に浸透していったという事実があるのではないだろうか。言うならば「平民の武士化」である。士族の人口比率そのものは低かったが、その思想は裾野を広げていき、武士が絶対的な圧力を持って上から押さえつける時代ではなくなったために庶民の側にもアレルギーは少なく、また明治初期のいきすぎた欧化主義の反動で国民主義の高まりが見えてきた時期から、消えてしまった武士階級への郷愁も相まって武士道の興隆をみたといえるのではないだろうか。

・明治期の武士道の新しい流れ

明治期における社会背景の変化をうけて武士道論は新たな展開を見せるようになる。前述1)及び2)について概観してみる。

1) 和魂的武士道

消滅してしまった武士階級への懐古の念とともに、日本人の精神的な基本理念として武士道を論じ、旧士族がみずからのアイデンティティ・ルーツを再確

認するものである。「和魂洋才」の中の日本的な部分としての和魂である。

筆頭は福沢諭吉『瘦せ我慢の説』であろう。明治二四年に書かれ、福沢の死の直前、明治三四年に時事新報に発表されたこの論説は徳川時代の三河武士の武士道精神を「瘦せ我慢」と称し、日本人の「独立自尊」精神の必要性を説いたものである。合理主義の権化と言われ、「門閥制度は親の仇でござる」という発言や「腐れ儒者」などの表現を使って封建的精神を否定していた福沢も日本の文明の進歩に貢献したのは日本魂のせいであると述べている。明治の思想界、言論界をリードし、功利主義的傾向のあった福沢においても武士階級出身者であり、思想の根底には武士道の影響がみられるのである。

明治思想を担った思想家達に「儒教的伝統」が息づいていたのはまぎれもなく事実であり、渡辺和靖は明治思想史を「明治における近代的自我の問題は人々が封建的な束縛から自らを解放して自我に目覚めていく過程としてとらえるのではなく儒教的伝統と近代認識論との相克葛藤として捉えたときに初めて正しく認識できる」¹⁰としている。

また『瘦せ我慢の説』の一年後、明治三五年に出版されたのが山岡鉄舟の『武士道』である。鉄舟自身が剣と禅の奥義を究め、その武士道の生き方、江戸開城時に果たした役割、明治期における身の処し方、すべてが世の人の見る典型的な「武士」そのものであった。鉄舟自身が書き記したわけではなく弟子達による聞き書きという体裁であるが、武士としての身の処し方、思想、道徳が盛り込まれた書である。

2) 皇道的武士道

明治二十年頃からの国家主義的風潮・日本主義運動によるもの。さらに日清・日露戦争の勝利に影響された武士道論である。代表的なものは明治三八年に出版された井上哲治郎の『武士道叢書』である。前述したように戦国期の戦陣訓を中心に収め、ここで井上は日清・日露戦争の勝利は日本古来の武士道にあり、天皇への唯一無二の忠誠こそが国歌のためであるとして武士道を天皇中心の国民の道徳であり戦争遂行の精神的支柱であるとしたのである。「忠」の概念、滅私奉公、さらに『葉隠』の「武士道とは死ぬことと見つけたり」の文を都合良く曲解し、国家のためには死をも厭わぬものとして武士道を解釈、喧伝したのである。後の『武士道全書』（昭和一七年）のもととなり、この書は太平洋戦争の遂行にあたって武士道精神を一あくまでも皇道的武士道観における精神であるが一称揚した。

「武」に関しての記述と戦士の基本的な心構えという観点でいえば、明治における皇道的武士道が凝縮発露したものが「軍人勅諭」であるといえる。

四、キリスト教的武士道

キリスト教に感化された旧士族の知識人・教養人の倫理観から論じられる武士道論である。

明治期におけるキリスト受容の代表的人物としては、植村正久、内村鑑三、新渡戸稲造等が挙げられるが、彼等に共通するのは明治維新において官軍側ではなかった士族が多いことだ。

大内三郎は、彼等明治初期のプロテスタント指導者の特徴として、儒教的教養を身につけた武士出身で、初めからキリスト教に入った訳ではなく、藩閥によらない栄達のために、まず西欧の語学・思想・学問を求め、そしてそれを学んだ外国人教師の影響によりキリスト教に感化された、として次のように述べる。

日本のキリスト者は、いずれもナショナリストでけっして自分一個の安心立命を得るためにキリスト教に入ったわけではなく、あくまで日本を文明開化の新日本にするためであった。すなわちキリスト教をば、西欧の近代文明を築き上げた啓蒙精神としてまた厳格清純な倫理として理解し、それによって自分の精神的支柱とし、よってもって新日本の精神的基礎にしようとしたのである。¹¹

また、山鹿素行が著した士道論中の「職分論」を例にあげ、武士のキリスト受容について分析する。

町人は物的金銭的「利」を得る賤しいものとされ、それに対し武士は精神的道徳的人倫の「義」をまもり、社会の綱紀肅正のための「道徳の教師」をもって自ら任じていた。

そうなると、明治維新の変革によって、武士は封禄という物的経済的基礎を喪ったに止らない。儒教が拠って立っている封建的地盤をうしなってしまうと、武士を支えていた精神的支柱も壊滅し去ったということである。武士はいっさいのものを、掌中からうしなったということにほかならない。ところで、キリスト教は文明の新日本形成を支える精神・道徳である。それは地上のものを物的肉的「利」としてこれを求むるものを賤しみ、天に宝を積み精神的信仰に生きるものを尊む。この新日本形成を急務とする新しい時代に、初代キリスト者は儒教にとって代わるべきものを

キリスト教に見出した。そのとき彼らは、かつて武士が自覚していたように、自己を「道徳の教師」として自覚したのである。¹²

植村正久は『福音新報』に掲載の一連の論文においてキリスト教と武士道の融合を説いた。

内村鑑三は『聖書之研究』掲載の著作の中で、

武士道は日本国最善の産物である。—中略— 武士道の台木に基督教を接いだ物、其物は世界最高の産物であって、之に日本国のみならず全世界を救ふ能力がある。¹³

と言及している。内村はイエスの教えに武士的気質を見、キリスト教と武士道の一体化をはかった。日本人の生き方として、キリスト教の道徳に日本の伝統的精神を融合させたところに道を見出すという態度だった。

また、キリスト教信者からの武士道論として大西祝は『六合雑誌』に「武士道対快樂説」として西洋文明によく比肩できるのは武士道であると述べ、「ストアの精神と武士の気風とを比較して我が国民の気質に論じ及ぶ」のなかでは武士道とストア主義との比較を試み、積極的に武士道を評価している。

岬龍一郎はなぜ武士道で育った人間がキリスト教を受容したか、できたかについて武士道とキリスト教の関連性を述べる。

プロテスタントの精神というものを調べてみると、それは不思議ではなく、むしろ当然だったというべきかもしれない。なぜなら、プロテスタントの精神というのは質素儉約を旨とし、自律・自助・勤勉・正直をモットーとする「自己の確立」を養成するもので、それは武士道の精神と相通するものがあつたからだ。逆にいうなら、彼らは人格形成としての武士道を幼きころから道徳律として叩きこまれていたために、キリスト教と武士道がその徳目において二律背反するものでないということを理解すると、武家社会が崩れて「君主」がいなくなったいま、その代わりとして「神」という新しき主を得た、ということであつたのだろう。¹⁴

また、福沢諭吉が『実業論』（明治二六年）において述べた新しい資本主義の担い手としての精神面・倫理面は一種プロテスタンティズムに通じる面があると俵木浩太郎は指摘する。

この点で、人はマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義』を思い起こすかもしれません。彼によれば、資本主義はプロテスタンティズムの「禁欲」の精神（瘦せ我慢と一脈通じます）が、「天職理念を土台とした合理的な生活態度」（武士たちの生活態度もけっこう合理的だったようです）を生み出したことによって成立することができたというのです。ですから彼の認識では、資本主義はキリスト教社会である「ただ西洋においてのみ」存在するということになります。しかし、かりに彼が日本における福沢の精神を知り、武士道を知っていたとすれば、サムライ精神もまた「資本主義の精神」たりえたことを知り、自説の基本的な正しさを確認できたことでしょう。西にプロテスタント・キャピタリズムあり、東にサムライ・キャピタリズムありということなのです。¹⁵

プロテスタンティズムと武士道における徳目との関連性という図式において初めて武士道は歴史的特殊性を超え、普遍的を持ち得る可能性にたどりつけるのである。

五、新渡戸稲造『武士道』について

新渡戸稲造は文久二年（1862年）南部藩士新渡戸十次郎の三男、七人兄弟の末子として盛岡鷹匠小路下ノ橋詰の邸で生まれた。二年前に大老井伊直弼が桜田門外に倒れ、この文久二年は坂下門外の変、寺田屋事件、生麦事件が起こるなど徳川幕府が揺れ動きはじめた時期である。

武士の家に生まれ幼少期に武士道教育を受け、明治維新後の時代変化とともに思春期以降は海外の思想・哲学を身につけざるを得ず、キリスト教に帰依し、海外留学、教育者を経て、日本と欧米の橋渡しという啓蒙活動に殉じた人物である。実生活においても妻はアメリカ人であり、当時は少なかった海外体験者として世界における日本の位置、明治日本の国際社会における卑小さを肌で体感していた。その業績は驚くほど多岐に渡る。農学から経済、植民地経営等の専門書から、広く一般市民にむけての「一日一善」に代表される啓蒙書など一連の著作、また札幌農学校教師に始まり台湾での植民地経営をはさみ一高校長、国際連盟の事務局長などの活躍から推測するに、彼は一途な学究の徒ではなく教育家・啓蒙家さらに実務家として評価されるべきであろう。

その新渡戸が記した武士道論は、彼が幼少期に受けた江戸期の「士道」としての武士道を根幹として西欧の倫理道徳としてのキリスト教の徳目と武士道の

その合致するところを詳述したものである。旧来の日本人の道德観念を、西欧が理解しやすいようキリスト教の枠組みを利用し、最初から英語で書かれたまさに海外の読者層を念頭において書かれたものなのである。

新渡戸の『武士道』への批判として必ず筆頭に挙がるのが、新渡戸の歴史認識の拙さ、武士道の歴史的特殊性への無知、他の幾多の武士道書をまったく顧みない参考文献・註の乏しさ、などがあるが、この著作の目的と著者の履歴、特性を鑑みればそれらの批判は多少的外れであるといわざるを得ない。新渡戸は歴史家でもなく、武士道の専門家でもない。彼は十代から二十代にかけて海外の思想・哲学を英語によって教育されたのであり、形而上的思索は日本語より英語の方が達者であったと個人的な述懐にもある。彼の頭にあったのは自身が体験した、海外で西欧人が日本を見る眼、西欧人が日本人に接するときに抱くある種の感情に対する反発であったろう。事実、将来妻となる女性メアリーと出会い、交際中には人物的に非常に高い評価を一あくまでも留学中の学生として一受けていたにもかかわらず、いざ結婚となると彼女の家族の猛烈な反対にあったという屈辱も忘れ難い経験として彼の心に残っていたであろう。

当然それらの経験も作用して『武士道』の記述には日本を美化する傾向がある。しかも日本と西欧をその道德的基盤において共通であるを書くことが目的であったにもかかわらず、日本人を特殊なもの、他に類を見ない優秀な民族といった書き方が散見されるのも事実である。この書を西欧に対する日本人美化のプロパガンダであり、西欧人の日本認識を誤らせるものだとする批判があるのも当然であろう。

しかし、海外において非常に売れたのも事実である。数々の言語に翻訳され版を重ねた。日露戦争の勝利によって日本という国に興味をいだいた人々の日本研究のための格好の入門書になったのである。日露戦争終結のために尽力したルーズベルト大統領もポーツマス条約締結以前に数冊購入していたといわれる。

もちろん新渡戸は日露戦争勝利を見越して書いたわけではなく、また日本の近代化の要因研究という目的があったわけではないが、結果としてそのような読まれ方をされたのも事実である。キリスト教との整合性を目指しキリスト教的価値観を持った読者を念頭において書かれたものが武士道書として、さらに日本人優秀説として一般の人々に読まれ日本において翻訳されベストセラーとなったこと、本人の思惑とは別に一挙に彼自身も有名人になってしまったことなどがこの『武士道』に当時絶賛の声もありながらそれと同じくらいの批判が集中し、賛否両論さまざまな意見が渦巻いた所以であろう。

長尾剛は「日本人が長年にわたって培ってきた武士道という美意識はよくも

悪くも消えることはなかったのである」とし、新渡戸を「武士道をより普遍的な人間の倫理・美意識として再構築し、これを日本オリジナルの世界道徳にまで高めて世界に発信した思想家である」と紹介した後、次のように分析する。

新渡戸の思想は、必ずしも武士道のあらゆる要素を盛り込んだものとは言えない。彼は、独自の判断で武士道を取捨選択し、近代的道徳に結びつく点のみを慎重に紡いだのである。だが、そうしたからこそ『Bushido』は世界的な評価を受けた。近代における武士道の再構築として、もっとも成功した成果であると言える。¹⁶

繰り返すが、『武士道』はキリスト教的価値観によって抽出された、江戸期における日本の武士道精神を基盤とする道徳体系を記述した書であり、全世界のキリスト教徒、またはキリスト教的価値観を持った人々を読者として想定し、書かれたものである。武士の実態、歴史を綴ったものではなく、ましてや武士道の研究書でもない。例を挙げれば、武家社会では常識だった衆道の流行、側室の存在など書くつもりもなく、このような価値判断からは書けるはずもなかったのである。

新渡戸の日本におけるキリスト教受容に関する考え方が表れている箇所が『武士道』序文にある。

さらに私は、神はすべての民族や国民—異邦人であろうとユダヤ人であろうと、キリスト信徒であろうと異教徒であろうと—「旧約」と呼んで差し支えない契約を結ばれた、と信じている。(29頁)

佐藤全弘は新渡戸の「日本のキリスト教化」と題する英文の内容にふれ、日本を通してキリストに仕えること、という新渡戸の姿勢を述べている。「キリスト信徒たることとこの国を愛することとは矛盾しない」と。そして「キリストの道は一つではない」としている新渡戸の論を紹介し、次のように新渡戸の考えを分析している。

キリスト教をよその信仰、外来宗教と考えることは間違っている、日本にとっての外来なら、西洋にとっても外来である。西洋には古代、他神野蠻の状態にあってキリスト教を受けた。それに比べれば日本には、仏教、儒教、武士道による霊の準備は整っていた。聖霊は日本にあり、日本の歴史において働き、日本を導いてキリストに至らせる、と新渡戸は論を進め

るのです。一中略—日本が野蛮未開のままキリストを迎えたのではない。霊の修練たる旧約の日本がそこにあった。日本だけでなくすべての民族は、その旧約を神から与えられている、と新渡戸は考えたのでした。¹⁷

新渡戸は近代の日本人の守るべきモラルバックボーンを武士道として伝え、また旧来の日本を形作ってきた伝統を、キリスト教的思想との共存で永続的なものにしていくため、これまでの日本の伝統的社会を「旧約」とし、「新約」を、日本人のための日本人独自のバイブルを作りたかったのではないのだろうか。それが『武士道』となって書き記されたのである。

六、結論

明治期において士族階層は旧武士の思想を引き継いで日本のリーダーシップをとったといえる。その結果「平民の武士化」が起り武士の思想、道徳観念が一般の人々に浸透していったともいえる。世界が日本を見るイメージは多々あるが「サムライの国」であるとの印象は強い。そのことがさほど悪いイメージでないことは、理想化された武士像というものが、武士階級が消滅してしまった明治にのみ作ることができたという一面があることは見逃せない。現実存在していた武士も士道によって洗練された東洋におけるジェントルマンであったかもしれないが、現実には存在しないからこそ良いところだけを抽出し、理想化しそれに近づくことを目指せたのではないだろうか。ノスタルジックな武士への思い、あこがれが明治における武士像を形作ったといえる。新渡戸も幼い頃に美化され教え込まれた「武士」になりたかったのであろう。その持ち続けたイメージが、日本は、日本人は国際社会でどうあるべきか、を自問自答した際に著作『武士道』となって表れたに違いない。

武士道は歴史とともに変遷していきさまざまな側面を持つ。武者の習いから戦陣訓、士道の確立を経て、武士階級の消滅した明治においてまた新たな面を持つに至った。1) 及び 2) の武士道も一つの思想哲学といえるが日本におけるローカルな思想ともいべきもので全世界的な普遍性は持ち得ない。試行錯誤ではあっただろうが、キリスト教的価値観と武士道の徳目との融合により世界の人々の武士道への、日本人への理解が容易になったとすれば、それは評価されるべきものであろう。

註

- 1 清原貞雄「中世の武士道と近世の武士道」京都帝国大学文学部史学科編『紀元二千六百年記念史学論文集』内外出版1941年183頁で他に大伴氏、佐伯氏の名を挙げている。
- 2 古田紹欽「仏教の道德教育」『日本道德教育史』第3章 48頁
- 3 三田村鷹魚「武士道の話」『江戸読本』昭和一四年三・四・七月掲載
- 4 富永健一『日本の近代化と社会変動』講談社学術文庫 1990年 378頁
また富永はこの国体論が維新以後も第二次世界大戦までその影響を持ち続け昭和ファシズムの思想的基盤になったとしている
- 5 永田広志『日本哲学思想史』法政大学出版局 1967年 20頁
- 6 遠山茂樹『明治維新』岩波現代文庫 2000年 311頁
- 7 中村吉治『武家の歴史』岩波新書 1967年 200頁
- 8 園田英弘・濱名篤・廣田照幸『士族の歴史社会学的研究』名古屋大学出版会 1995年 51頁
- 9 深谷博治『華士族秩禄処分の研究』吉川弘文館 1873年 9頁
- 10 渡辺和靖『明治思想史—儒教的伝統と近代認識論』ぺりかん社1978年12頁
- 11 大内三郎「キリスト教と道德教育」古川哲史編『日本道德教育史』有信堂 1973年 231頁
- 12 同上 232—233頁
- 13 『内村鑑三全集』第15巻393頁
- 14 岬龍一郎『新・武士道』講談社新書 2001年
- 15 俵木浩太郎『新士道論』筑摩書房 1992年 212頁
- 16 長尾剛『日本がわかる思想入門』新潮文庫 2000年 260頁
- 17 佐藤全弘『新渡戸稲造の信仰と理想』教文館 1985年 78頁

参考文献

- 池上英子『名誉と順応—サムライ精神の歴史社会学』森本醇訳NTT出版2000年
石井紫郎校注「近世武家思想」『日本思想大系』27巻岩波書店1974年
井上哲次郎、有馬佑政編『武士道叢書』博文館 1905年
今枝愛真『禅宗の歴史』至文堂 1962年
植松忠博『士農工商—儒教思想と官僚支配』同文館 1991年

- 内村鑑三『代表的日本人』岩波新書 1995年
- 梅溪昇『明治前期政治史の研究』未来社 1963年
- 大内三郎「キリスト教と道德教育」古川哲史編『日本道德教育史』有信堂1973年
- オオシロ・ジョージ『新渡戸稲造—国際主義の開拓者』中央大学出版部1992年
- 太田雄三『<太平洋の橋>としての新渡戸稲造』みすず書房 1986年
- 大西祝「武士道対快樂説」『大西祝全集』第6巻日本図書センター 1982年
- 笠谷和比古『士思想』日本経済新聞社 1993年
- 勝田政治『廃藩置県』講談社選書メチエ 2000年
- 勝部真長『武士道—文武両道の思想』角川書店 1971年
- 清原占雄「中世の武士道と近世の武士道」京都帝国大学文学部史学科編『紀元二千六百年記念史学論文集』内外出版 1941年
- 小池喜明『葉隠—武士と「奉公」』講談社学術文庫 1999年
- 小泉一郎「新渡戸博士とクェーカー主義」東京女子大学新渡戸稲造研究会編『新渡戸稲造研究』春秋社 1969年
- 近藤齊『戦国時代武家家訓の研究』風間書房 1978年
- 佐伯有義・他編 井上哲次郎監修『武士道全書』時代社 1942年
- 相良亨『武士の思想』ペリかん社 1948年
- 佐藤全弘『新渡戸稲造の信仰と理想』教文館 1985年
- 鈴木文孝『近世武士道論』以文社 1991年
- 園田英弘・濱名篤・廣田照幸『士族の歴史社会学的研究』名古屋大学出版会 1995年
- 高澤秀次『海をこえて近代知識人の冒険』秀明出版会 2000年
- 俵木浩太郎『新士道論』筑摩書房 1992年
- 遠山茂樹『明治維新』岩波現代文庫 2000年
- 富永健一『日本の近代化と社会変動』講談社学術文庫 1990年
- 長尾剛『日本がわかる思想入門』新潮文庫 2000年
- 永田広志『日本哲学思想史』法政大学出版局 1967年
- 中村吉治『武家の歴史』岩波新書 1967年
- 奈良本辰也『武士道の系譜』中央公論社 1971年
- 新渡戸稲造『武士道』佐藤全弘訳 教文館 2000年
- 西部邁『福沢諭吉—その武士道と愛国心』文藝春秋 1999年
- 西義之「Bushido考—新渡戸稲造の場合」東京大学教養学部紀要『比較文化研究』第20・21輯 東京大学出版会 1981年
- 尾藤正英『日本封建思想史研究』青木書店 1961年

- 深谷博治『華士族秩禄処分の研究』吉川弘文館 1873年
福地重孝『士族と士族意識』春秋社 1956年
古川哲史「武士道の思想とその周辺」『日本倫理思想史研究』福村書店1957年
古田紹欽「仏教の道德教育」古川哲史編『日本道德教育史』有信堂1973年
松隈俊子『新渡戸稲造』みすず書房 1981年
岬龍一郎『新・武士道』講談社新書 2001年
源了圓『徳川思想小史』中公新書 1973年
村岡典嗣『日本思想史研究』岩波書店 1975年
渡辺和靖『明治思想史—儒教的伝統と近代認識論』ぺりかん社 1978年
和辻哲郎「武士道」岩波講座『倫理学』第12冊岩波書店 1940年
和辻哲郎『日本倫理思想史 上・下巻』岩波書店 1979年